

抄に、井堤いの蛙のおもしろきよしを誌す、是山蛙也、近年江戸にもとめよせたりと聞り、余いまだ不知。

〔河蝦考〕万葉集に、河蝦カハツ鳴、また河津妻呼などよめる河蝦カハツは、後の世に蛙鳴云々よめるものとは、おなじからず、略中 河蝦と河鹿カジカとのけぢめ、さだかならざるがうへに、後世カジカ加自カジカ加とよぶもの、魚と

蟲と二種ありて、ともに古名にあらず、略中 又二種なることをえらぬ人、一種によりて論ずるあり、略中 今の世には、かはづといへば、春の田沼などに、うたてかしがましきまで鳴ものとのみおぼえて、秋のころ鳴ものとは思はざる人おほし、そは万葉の歌より後、千百餘年、河蝦を秋の歌に

よむこと、たえてなかりしかば、さることにはあれど、いにしへに河津とよみしは、山川の清きながれにすみて、夏の末より秋かけて、さかりに聲めでたく、鳴ものをいひて、春の田溝、すべて堪水に鳴ものをば蛙カエルといひて、かはづとは、いはざりけむ、万葉の歌にて見れば、河蝦カハツは山川にすみて

秋かけてなくものをいひしなり、古今集の序に、花に鳴うぐひす、水に住かはづの聲をきけば、云いへりしは、春と秋とをむかへてかける文なれば、河蝦カハツは秋のものなることゑるし、略中 万葉

十秋雜歌の中に詠蝦歌五首、皆山川にのみよみて、田沼などによめるはひとつもなし、このほか

もみなしかり、

三吉野乃石本不避、鳴川津諾文、鳴來河乎淨、カミシノノイハキトサラズナガカツツクニウタナキケリカハチサヤケミ

神名火之山下、動去水丹、川津鳴成、秋登將云鳥屋、カミナヒビノヤマシタドミユクミツニカバツナリナキトイムトヤ

草枕客爾物念、吾聞者、夕片設而、鳴川津可聞、クサマクラクシニモオモフワガキケバユラカタマテテナクナガカツツカモ

瀬乎速見、落當知足、白浪爾川津、鳴奈里朝夕每、セハヤミオチタキチタルシラサニカハツツナリナリアサヨヒゴトニ

上瀬爾川津、妻呼暮去者、衣手寒三、妻將枕跡香、カミツセニカハツツヨブユラサレバヨロモテサムミツマカムツカトカ

古今の序にいへるも、このものならでは、鶯の聲に對しがたし、略中 河鹿といふ魚は、聲うるはし